公益の風 #1

「コロナ禍の公益大大学院」

東北公益文科大学大学院
公益学研究科長 武田真理子

2020年は世界中の人々が新型コロナウイルス感染症の脅威に曝され、大変な恐怖と困難に見舞われる年となりました。ワクチンの開発と同時に、ウイルスの変異株の出現が確認され、2021年6月15日現在の世界の感染者数は1億7620万人を超え、380万人の方が感染症が原因で亡くなっています。

山形県庄内地域では市民の協力により地域社会全体としては比較的落ち着いた状況が続いているように見えますが、個人、家族、団体、法人等のミクロ・レベルでは大きな苦境に直面されている方が少なくないことが報道や各種統計から明らかになっています。

東北公益文科大学は、庄内地域の恵まれた環境と学生、保護者、関係者の方々のご理解とご協力により、2020年6月以降は酒田と鶴岡の両キャンパスに学生が通い、対面授業を継続できています。一方で、オンライン授業を実施するための体制も整備され、この一年間で授業の実施方法、課題の提出方法、学生と教員間のコミュニケーション・ツールなどの選択肢が広がり、大学教育が大きく変化していることを実感しています。

特に大学院においては、社会における大学院教育と研究の役割が問い直される時代の到来を感じています。パンデミックは、私たち人間社会に対し、改めて、生命科学・自然科学等の基礎研究の発展、データ・サイエンスの普及、グローカルな視点に基づく課題解決とそのための体制整備、多様な主体の連携に基づく持続可能で包摂的な地域社会の構築、行政運営におけるガバナンスの推進などの課題を提示しています。そして、世界中のNPO・NGO、企業や社会起業家、公的機関などがこれらの課題の克服のための新しい挑戦に向かって競い合う社会変革期に突入していると考えます。世界各国の大学・大学院はこの社会変革期にどのような役割を果たせるのか、ということが問われているのです。

このような認識に基づいて、現在、公益大大学院の「これから」を考え、改革を進めようとしています。本大学院は、世界で唯一の公益学の研究・教育拠点として山形県鶴岡市に開設され、修士課程の開設から17年目、博士後期課程の開設から15年目を迎えました。これまでに157名の公益学修士と3名の公益学博士を輩出しています。地域の大学として、そしてIT技術の普及により一層近くなった「世界」の中で、本大学院だからこそ展開できる社会変革期に求められる教育の内容と方法、学際的な研究の推進、そして地域及び社会への貢献のあり方について関係者との対話を重ねながら検討を進めています。

本連載では、本大学院の教員、修了生、大学院生、関係者によるリレー・エッセイ形式により、社会変革期の多様な地域・社会の課題への視座、東北公益文科大学大学院における学びと研究の成果を発信し、紙面を通じた読者の皆様との学び合いを深めたいと考えています。次号は、引き続き武田が担当をさせて頂き、コロナ禍の政治と社会保障制度運営について、ニュージーランドを対象とした研究の一端をご紹介したいと思います。

「敬天愛人」2021年7月号Vol.148掲載（荘内日報社発行）